

第3回：ことばの典礼

聖イグナチオ教会 主任司祭 高祖 敏明

ミサの中心部分は「ことばの典礼」と「感謝の典礼」から成り、その前と後を「開祭」と「閉祭」が包む形をとっています。「ことばの典礼」は朗読台が儀式的要で、「神のことばの食卓」とも呼ばれます。もう一方の「感謝の典礼」は、主イエスと弟子たちの最後の晩餐の記念ですので、祭壇＝食卓を中心に行われ、「キリストのからだの食卓」という祭儀です。今回（第3回）は前回の「開祭」を受け、「ことばの典礼」＝「神のことばの食卓」の典礼的構造や各部分の役割などを、本日（年間第23主日A年）の「ことばの典礼」を例にとりながら、一緒に学びたいと思います。

★「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、私もその中にいる」

（本日の福音の中でイエスが弟子たちに語られた言葉から：マタイ 18章 20節）

I。神とともに歩む救いの歴史を通して感謝の祭儀を捉える—シノドス最終文書を用いて

(1) 教会生活が立ち帰る源泉—最終文書のよって立つ基盤（冒頭の数字は文書内の項番）

- 1 教会の生活における新たな歩みは、どれもが源泉への立ち帰りでです。復活の日の夕刻に、二階の広間で弟子たちが体験した復活した主との出会いを、今一度味わうのです。このシノドス総会に参加する中で、わたしたちもまた彼らのように、主のいつくしみに包まれ…霊における会話を味わい、互いに耳を傾ける中で、わたしたちの間に主の現存を感じていました。聖霊をお与えになることによって、ご自分の民の間で、多様性の調和である一致へと駆り立て続けておられるかたの存在です。（本文中の太字は引用者）

(2) 最終文書の内容と構成—目次から

日本語訳版(カトリック中央協議会、2025年6月)：『シノドス流の教会 交わり、参加、宣教 《シノドス最終文書》教皇フランシスコ/世界代表司教会議第16回通常総会』教皇フランシスコによる付記(2024年11月24日(王であるキリストの祭日)バチカンにて)はじめに (1-12)

第一部 シノダリティの神髄——聖霊によって回心に呼ばれた者たち (13-48)

第二部 舟で一緒に——かかわりの回心 (49-78)

第三部 網を打ちなさい——道筋についての回心 (79-108)

第四部 豊漁——きずなについての回心 (109-139)

第五部 「わたしもあなたがたを遣わす」——宣教する弟子という民族の形成(140-151)

結 び——すべての民のための祝宴 (152-155)

付 録 補注・資料

(3) 私たちの教会の存在理由 (★第一部 シノダリティの神髄 (13~48) から)

14 教会は、決定的な歴史の出来事、イエスの復活を、世にあかしするために存在しています。復活したかたは、世界に平和をもたらし、ご自分の霊のたまものを与えておられます。生きておられるキリストは、真の自由の源、欺くことのない希望の礎、神の真のみ顔の啓示、人間の最終目的の啓示であります。復活の信仰にあずかり、その証人となるには、自分の内面的なむなしさ、恐れ、疑い、罪の闇の自覚が必要だと福音書は教えています。ですが、闇の中にあっても勇気を出して外に出て探し求める人は、実は自分が探されていて、名を呼ばれており、ゆるされ、イエスとともに兄弟姉妹へと遣わされていることに気づくのです。

17 …異なる文脈、異なる文化の中で生きる、それぞれの部族、言語、民族、国から集められる…神の民は、洗礼を受けた者たちの単純な総和では決してなく、シノダリティと宣教の共同体的・歴史的な主体であり、今はまだ時の中を旅していながらも、すでに天上の教会との交わりのうちにある…個々の教会が根を張るさまざまな文脈の中で、神の民は救いの「よい知らせ」を告げ知らせ、あかししています。世にあって、世のために生きること、神の民は地上のすべての民とともに歩み、彼らの宗教や文化と対話し、そこにあるみことばの種を認め、神の国に向けて前進するのです。…

(4) キリスト者として生きる基盤：神の民の秘跡的ルーツ

21 教会がたどったシノドスの旅で気づかされたのは、多様な召命、カリスマ、奉仕職には一つのルーツがあるということです。それは、「皆一つのからだとなるために洗礼を受け、皆一つの霊を飲ませてもらった」(I コリント 12・13) ということです。洗礼は、キリスト者として生きるうえでの基盤です。すべての人は洗礼によって、神の子となります、つまりイエスの御父との関係に霊的に加わるという最大の恵みに引き入れられるからです。一人ひとりに等しく与えられているこの尊厳に勝るものではなく、この恵みによってわたしたちはキリストをまとう者となり、ぶどうの木の枝のようにキリストに接ぎ木されるのです。わたしたちにとっては栄誉な「キリスト者」という名には、その恵みが含まれています。それは、わたしたちの生き方の基盤であり、わたしたちを兄弟姉妹としてともに歩めるようにしてくれるのです。

15 神の民であるというアイデンティティは、父と子と聖霊の名による洗礼から生まれます。このアイデンティティは聖性への招きとして、救いのたまものを受けるようすべての民を招く宣教への派遣として具現化されます(マタイ 28・18-19 参照)。…すべてのキリスト者の生は、三位一体の神秘にその起源と目指す先を有しており、その三一の神秘がわたしたちのうちに信仰、希望、愛のダイナミズムを呼び起こすのです。

(5)一致の秘跡：感謝の祭儀（「ことばの典礼」と「感謝の典礼」）

16 「神は、人々を個別的に、まったく相互のかかわりなしに聖化し救うのではなく、彼らを、真理に基づいて神を認め忠実に神に仕える、一つの民として確立することを望んだ」（『教会憲章』9）。み国を目指して旅する神の民は、交わりと一致の源であるエウカリスチアによってたえず養われています。「パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つのからだです。皆が一つのパンを分けて食べるからです」（Ⅰコリント 10・17）。教会は、キリストの聖体の秘跡によって養われ、主のからだとして形成されます（『教会憲章』7 参照）。「あなたがたはキリストのからだであり、また、一人ひとりはその部分です」（Ⅰコリント 12・27）。教会は、恵みによって活気を得た、聖霊の神殿です（同憲章 4 参照）。教会を生き生きとさせ、築いてくださるのはまさに聖霊であり、この方がわたしたち皆を、霊的な建物の生きた石にしてくさるのです（Ⅰペトロ 2・5）。

26 感謝の祭儀、とりわけ主日の祭儀は、聖なる神の民が集いまみえる、第一の基本の私たちです。感謝の祭儀において、「教会の一致が表され、もたらされる」（『エキュメニズムに関する教令』2）のです。すべての信者の「十全に、意識的かつ行動的……参加」（『典礼憲章』14）をもって、さまざまな奉仕と司教や司祭の司式をもって、キリスト教共同体は目に見えるものとなり、その共同体の中で、すべての人がそれぞれ分担する、宣教に対する共同責任が果たされるのです。ですからキリストのからだである教会は、感謝の祭儀を通して、一致と多様性との調和的な連結を学びます。教会の一致と感謝の祭儀の多様性との、秘跡の神秘的的一致と典礼の多様な伝統との、祭儀の一致と召命やカリスマや奉仕職の多様性との、調和的な両立です。聖霊の生み出す調和は一様ではないことを、教会のたまものはどれも共同体の構築に向けられていることを、感謝の祭儀ほど雄弁に語るものではありません。感謝の祭儀は、洗礼を受けたすべての人が願い求める、いまだかなわぬ完全で目に見える一致の表れでもあります。主日の感謝の祭儀を望みつつも、それがかなわない場合、共同体はみことばの祭儀に集います。そこにも、キリストはやはり現存しておられるのです。

(6) 神のことばに耳を傾ける

83 神のことばに耳を傾けることは、どの教会的識別においても出発点であり基準です。まさに聖書は、神がご自分の民に語られ、イエスにおいてすべての啓示の充満を与え尽くしてくださったことを明かし（『神の啓示に関する教義憲章』2 参照）、神の声を聞くことのできる場を示しています。神は、何よりもまず典礼の場でわたしたちと意思のやり取りをなさいます。「聖書が教会で読まれるとき」（『典礼憲章』7）、語っているのはキリストご自身だからです。神は、教会の生きた聖伝、教導職、聖書の個人や共同での黙想、民間信心業を通して…貧しい人の叫びを通して、…人間の歴史の中の出来事を通して、ご自身を現し続けておられます。また神は、創造なさったものを通して、ご自

分の民とコミュニケーションを取られます。…最後に、神は各人の良心においても語ります。そこは「人間のもっとも秘められた中心であり聖所であって、そこで人間は独り神とともにあり、神の声が人間の内奥で響く」(『現代世界憲章』16)場です。教會的識別のためには良心を絶えず監督し培い、信仰の感覚を成熟させることが肝要。神が語っておられる場、ご自分の民に会いに来ておられる場を見落とすことのないようにです。

II. ミサの中の「ことばの典礼」の位置と構造

(1) ミサは二つの食卓が中心：

(2) 「ことばの典礼」の「開祭」とのつながり(「ローマ・ミサ典礼書の総則」46 参照)：

「開祭」(①入祭、②あいさつ、③回心の祈り、④いつくしみの賛歌(キリエ)、⑤栄光の賛歌(グロリア)、⑥集会祈願)は、ミサの開始、導入、準備の性格をもっている。

これらの目的は、一つに集まった信者が一致することと、神のことばを正しく聴き、感謝の祭儀をふさわしく行うよう自らを整えることにある。

(3) 「ことばの典礼」の形式的構造：

1) 主日ミサの場合の「ことばの典礼」は次の8要素からなり、この順序で営まれる。

- | | | | |
|-------|-------|-------|---------------|
| ①第1朗読 | ②答唱詩編 | ③第2朗読 | ④アレルヤ唱(ないし詠唱) |
| ⑤福音朗読 | ⑥説教 | ⑦信仰宣言 | ⑧共同祈願(信者の祈り) |

2) 週日(祝祭日以外)ミサの場合の「ことばの典礼」は次の5要素からなる。

- ① 第1朗読 ②答唱詩編 ③アレルヤ唱(ないし詠唱) ④福音朗読 ⑤説教(自由)

(4) 「ことばの典礼」の内的質的構造と相互の関連=主日ミサの場合：

総論：「ことばの典礼」の主要部分は「聖書から採られた朗読」と「朗読の間にある歌」。これに続く説教、信仰宣言、共同祈願(信者の祈り)は、「ことばの典礼を展開し、結ぶものである。説教によって解説される聖書朗読の中で、神はその民に語られ、あがないと救いの神秘を説き明かし、霊的な糧をお与えになるからである。」

「キリスト自身が、自らのことばによって信者の間に現存される。この神のことばを、会衆は沈黙と歌によって自分のものとし、信仰宣言によって自らに結び付ける。」

「会衆は神のことばに養われ、共同祈願によって教会全体の必要と全世界の救いのために祈りをささげる」(「ローマ・ミサ典礼書の総則」55)。

(5) 沈黙の時間の重要性：

「ことばの典礼は、沈黙を助けるように行われなければならない。」

「…集まった会衆に合わせて短い沈黙のひとつきを取ることで…によって、聖霊に促され、神のことばを心で受け止め、祈りを通して応答を用意することができる。」

「この沈黙のひとつきは、たとえば、ことばの典礼そのものが始まる前、第一朗読と第二

朗読の後、そして説教が終わってから適宜取ることができる」(以上、総則 56)。

(6)聖書朗読の意義：

「聖書朗読において、神のことばの食卓が信者のために備えられ、聖書の宝庫が開かれる。したがって、旧約と新約ならびに救いの歴史が一つであることを明らかにする聖書朗読の配分が保たれるようにするのが望ましい。…神のことばを含んでいる朗読と答唱詩編を聖書以外の他の文言に代えるべきではない」(総則 57)。

(7)聖書朗読の担当者：

「会衆の参加するミサの祭儀では、朗読は常に朗読台から行われる」。

「朗読奉仕者は、福音を除き、聖書を朗読するために選任される。」(総則 99)。

(8)朗読台＝朗読台が儀式の要：

「神のことばはその尊厳のゆえに、教会堂の中にふさわしい場所を設け、そこから告げ知らせる…一般的には、この場所は、可動性の簡易な書見台ではなく、固定された朗読台であることが適当。朗読台は、各教会堂の構造に応じて、叙階された奉仕者と朗読奉仕者(朗読者)が信者からよく見え、ことばがよく聞き取れるように配慮しなければならない。

朗読台からのみ朗読が行われ、答唱詩編及び復活賛歌が唱えられ、説教を行う。共同祈願の意向を唱えることも可。朗読台には、ことばの奉仕者のみが立つ」(以上、総則 309)。

(9)聖書朗読：

「主日と祭日には3つの朗読、即ち預言書、使徒書、及び福音書が割り当てられている。これらの朗読によってキリストを信じる民は、神の偉大な計画に導かれて、救いのわざが続いていることについて学ぶ…。これらの朗読は厳密に用いられなければならない。復活節には教会の伝統に従い、旧約聖書の代わりに使徒言行録から朗読する。…祝日には2つの朗読がなされる。

聖人の記念日には、固有の朗読がないなら週日に割り当てられた朗読が、ある場合には、聖人の霊的生活や活動の特別の側面に光を当てたふさわしい朗読が用意されている。その使用は、司牧的な理由による場合以外、強制されていない」(総則 357)。

「週日用の朗読聖書には、1年の周期全体を通して各週のそれぞれの日のために、朗読が配分されている。したがって、固有の新約聖書の朗読をもつ祭日、祝日、または記念日に当たらないかぎり、これらの朗読が、その割り当てられた日に行われる」(総則 358)。

(10)聖書朗読後の応唱：

「朗読した人はそれぞれの朗読の後に応唱し、集まった会衆はそれに答えて、信仰と感謝の心をもって受け取った神のことばに誉れを帰する。」

Ⅲ。「ことばの典礼」の8構成部分の意味と役割 ★本日の朗読箇所を参照

(1)第1朗読:「集会祈願が終わると一同は着席する。司祭はごく短い言葉で、信者をことばの典礼に導くことができる。朗読奉仕者(朗読者)は朗読台へ行き、すでにミサの前にそこにおかれていた朗読聖書から第一朗読(当日の福音の内容に呼応する旧約聖書)を行い、一同はそれを聴く。日本では、終わりに朗読奉仕者(朗読者)は手を合わせて「神のみことば」と呼びかけ、一同は「神に感謝」と答え、朗読の後、一同はしばらく沈黙のうちに神のことばを味わう」(総則 128)。「それから、詩編唱者あるいは朗読奉仕者(朗読者)自身が詩編を唱え、通常、会衆は答唱する」(総則 129)。★本日:エゼキエル 33・7-9

(2)答唱詩編:「第一朗読の後に答唱詩編が続く。朗読の内容を味わい黙想しながら、その内容にふさわしい詩編の言葉を歌ったり、唱えたりして、神からの呼び掛けに応える」。「答唱詩編は、少なくとも会衆の答唱に関しては歌われることが望ましい。…詩編唱者もしくは詩編の歌唱者は朗読台あるいは他のふさわしい場所で詩編の先唱句を唱え、会衆一同は座ってそれを聴く。…会衆は通常、答唱によって参加する」(総則 61)。

(3)第2朗読:使徒書より、毎週継続して朗読される。「福音の前に第2朗読がある場合、朗読奉仕者(朗読者)は朗読台から朗読を行う。一同はそれを聴く。終わりに朗読奉仕者(朗読者)は手を合わせて「神のみことば」と呼びかけ、一同は「神に感謝」と答える。それから日本では、一同はしばらく沈黙のうちに神のことばを味わう」(総則 130)。「続いて、一同は起立し、典礼季節に従ってアレルヤ唱あるいは他の歌を歌う」(総則 131。総則 62-64 参照)。★本日:ローマ 13・8-10

(4)アレルヤ唱(詠唱):福音を聴く準備としてキリストを迎える心で立って歌う(唱える)。「福音の直前に置かれた朗読(第1朗読ないし第2朗読)の後には、典礼季節に応じて、典礼法規によって定められたアレルヤ唱あるいは他の歌が歌われる。この応唱は、それ自体独立した儀式もしくは行為となっており、これによって信者の集会は福音朗読において彼らに語りかける主を迎えてあいさつし、自らの信仰を歌によって表明する。聖歌隊あるいは先唱者が先導して一同が起立して歌い、必要なら繰り返す。唱句は聖歌隊あるいは先唱者によって歌われるが、日本では、聖歌隊がない場合や先唱者がいない場合は一同で歌うこともできる。★本日のアレルヤ唱を参照

アレルヤ唱は四旬節以外のすべての季節に歌われる。唱句は、朗読聖書あるいはローマ聖歌集から採る。(ハレルヤ=「ヤハ(ウェ)を讃えよ」=ヤハウエ賛美を呼びかける定型句)四旬節には、アレルヤ唱の代わりに朗読聖書に示された福音前の唱句を歌う。ローマ聖歌集の指示に従って、他の詩編もしくは詠唱を歌うこともできる」(以上、総則 62)。

「続唱は、主の復活と聖霊降臨の日以外は任意であり、アレルヤ唱の前に歌う」(総則 64)。

参考:へ:Hallelu-yah ギ:halleluia ラ・英・仏:alleluia 独:halleluia

(5)福音朗読：4 福音書のいずれかが継続して朗読される。朗読者は助祭か司祭が務め、朗読台から読む。会衆は福音への尊敬を表す姿勢、つまり立って聴く。

★本日：マタイ 18・15-20

「福音の朗読はことばの典礼の頂点である。福音の朗読に最大の尊敬を払うべきことは、他の朗読以上に特別の榮譽をもってこれを際立たせていることによって典礼自体が教えている。

福音を告げ知らせるために任命された奉仕者は、祝福あるいは祈りによって自らを準備する。信者は、キリストが現存され、彼らに語っておられることを応唱によって認め、公言し、朗読を起立して聴く。また朗読福音書に対して表敬のしるしが示される」(総則 60)。

「朗読福音書が祭壇上にあれば、司祭はそれを取り、信徒の奉仕者を先頭に、朗読福音書を少し高く上げて朗読台に行く。…列席者は朗読台の方を向き、キリストの福音に対する特別な尊敬を表する」(総則 133)。

「司祭は朗読台で福音書を開き、手を合わせ、「主は皆さんとともに」と唱える。会衆は「またあなたとともに」と答える。それから「OOO による福音」と唱え、親指で福音書に十字架のしるしをする。そして自分の額、口、胸に十字架のしるしをし、他のすべての者も同じようにする。会衆は「主に栄光」(主よ、あなたに栄光)と応唱する。

続いて、司祭は福音を告げ知らせ、日本では朗読後、福音書を両手で掲げて表敬し、「主のみことば」と呼びかけ、一同は「キリストに賛美」(キリスト、あなたに賛美)と答える。その後司祭は「福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように」と静かに唱える」(以上、総則 134)。 ★「あなた」と呼びかけている点に注目

(6)説教：「聖書の本文に基づいて、信仰の秘儀とキリスト教生活の諸原則を説明する」(『典礼憲章』52)。その日に朗読される聖書のことばを通して神が私たちに何を語りかけており、それがどのような意味を持つのかを説明する。通常は司式司祭が行い、会衆は座って聞く。

「司祭は席または朗読台、あるいは適当なら他のふさわしい場所に立って、説教を行う。説教の後に沈黙のひとつときを取ることができる」(総則 136)。

「説教は典礼の一部であって、大いに勧められる。それは、キリスト者の生活の糧として必要だから…説教は、朗読された聖書のある側面、もしくはその日のミサの通常式文または固有式文の一部の説明となるべきもので、祝われている神秘や聞き手の特別な必要を考慮に入れて行われる」(総則 65)。

「主日と守るべき祝日には、会衆が集まって祝われるすべてのミサにおいて重大な理由がないかぎり説教を省くことはできない。その他の日にも、特に待降節、四旬節、復活節の週日に、さらに他の祝日、およびより多くの会衆が教会に集まる機会に説教が勧められる。説教の後に短い沈黙のひとつときがふさわしい場合には、そうする」(総則 66)。

(7)信仰宣言：聖書を通して伝えられる神のことばに応える形で、信仰の核となるところを

立って宣言する。11世紀ごろからローマ典礼に取り入れられた慣習。

「信条すなわち信仰宣言が目指しているのは、集まった全会衆が、聖書から採られた朗読の中で告げられ、説教を通して解説された神のことばに応答すること。また、典礼で用いるために認可された式文をもって信仰の規範を宣言することにより、感謝の典礼の中で信仰の偉大な諸神秘が祝われる前にそれらを思い起こし、表明することである」(総則 67)。

「信条は、主日と祭日に、司祭が会衆とともに歌うか唱えるべきものである。また、盛大に祝われる特別な祭儀においても用いることができる。

歌われる場合、司祭、あるいは適当であれば先唱者か聖歌隊が歌い始め、全員と一緒に、あるいは会衆と聖歌隊が交互に歌う。歌わない場合は、一同と一緒に、もしくは二手に分かれて互いに応唱して唱えるべきである」(以上、総則 68)。

「司祭と会衆はともに立って、一同で信条を歌うか唱える。日本では、「聖霊によって、おとめマリアより…」(ニケア・コンスタンチノーブル信条)または「主は聖霊によってやどり…」(使徒信条)のことばで、一同は手を合わせて深く礼をする」(総則 137)。

(8)共同祈願:「信者の祈り」とも呼ばれ、司祭の導入のことばに続いて「全教会と地方共同体のため、世界の救いのため、種々の困難にあって苦しむ人々のため」(『ミサの聖書朗読指針』30)に、立って祈り、司祭が結びの祈願で結ぶ。古代からミサの中で会衆が参加する重要な部分であったが、中世以降すたれていた。第2バチカン公会議によって復興された。

「信条を唱え終わると、司祭は席で立ち、手を合わせ、短い勧めのことばによって信者を共同祈願に招く。続いて、先唱者か朗読奉仕者(朗読者)か他の者が、朗読台もしくは他のふさわしい場所から会衆に向かって意向を述べる。会衆は自らの役割を果たすために心を込めて答える。最後に、司祭は手を広げ、祈りによって嘆願の祈りを結ぶ」(総則 138)。

「共同祈願すなわち信者の祈りにおいて、会衆は信仰のうちに受け入れた神のことばに何らかの方法で答え、洗礼による自分の祭司職の任務を果たして、すべての人の救いのために神に祈りをささげる」(総則 69)。

「意向は通常、次の順序で行う。a)教会の必要のため、b)国政にたずさわる人々と全世界の救いのため、c)あらゆる種類の困難に悩む人々のため、d)現地の共同体のため。ただし、堅信、結婚、葬儀などの特別な祭儀においては、それぞれの状況をよりよく考慮して意向の順序を決めることができる」(総則 70)。

「述べられる意向は偏りのないもので、よく考えて自由に、簡潔な言葉でつくられ、共同体全体の願いを表明するようにすべきである。★本日の共同祈願を参照

会衆は起立して、それぞれの意向の後に唱える共同の嘆願によって、あるいは沈黙のうちに祈ることによって、自身の祈りであることを表現する」(総則 71)。

IV. 本日の主日ミサの「ことばの典礼」を改めて考える

説教案：年間第 23 主日 A 年（2026 年 9 月 6 日、8：30）

エゼキエル 33・7-9、ローマ 13・8-10、マタイ 18・15-20

主日の第一朗読：当日の福音の内容に呼応するものが旧約聖書から読まれる。

エゼキエル：主の言葉をイスラエルの民に告げる預言者が「見張り」と呼ばれ、主から託された言葉を悪人に伝え、主の命令に反して死に至る、その道から離れるよう警告する。

福音：罪（＝教会が定める罪）を犯した兄弟（信仰仲間）に、立ち戻り和解するよう忠告する。

その兄弟に対して①当人と二人だけでの忠告、②数人の証人を交えての話し合い、③教会共同体での究明、の 3 段階で対応していく。

⇒その人を裁き、断罪するのではなく、「迷い出た羊＝兄弟」に善き牧者が対するように信仰者の道への立ち戻り、教会との和解、神との和解へと招く。

★聖書と典礼：警告＝民を断罪するためでなく、回心させ新しく生まれ変わらせるため。

★同：「教会共同体では、罪を犯した兄弟も、小さい者、迷った羊であり、そうした兄弟も見失わないようにする努力、相手を尊びながらの 3 段階の対応が求められる。」

その根拠が二つ示される：イエスが「はっきり言うておく」を 2 回繰り返して語られる。

①「あなた方が地上で繋ぐことは天上でも繋がれ、地上で解くことは天上でも解かれる」。しかし、これが可能となり実現したのは、アレルヤ唱が示すとおり、「神はキリストのうちに世をご自分委和解させ、和解の言葉を私たちに委ねられた」から。

②「どんな願い事でもあなたがたの内二人が地上で心をつにして求めるなら、私の天の父はそれをかなえてくださる。二人または三人が私の名によって集まるところには、私のその中にいる」しかし、これが可能となり実現したのも上と同じ。

第二朗読：第一朗読や福音の伝えたことが初代教会でどのように実行されたかを教える。

ローマ：互いに愛し合うことの大切さを強調し、「隣人を自分のように愛しなさい」という。

⇒「悪人に、その道から離れるよう警告する」ことも、「罪を犯した兄弟に、立ち戻るよう働きかける」ことも、「隣人を自分のように愛する」ことの実践の一つと言える。

★私たち：嫌なこと、不愉快なことをされたら、往々にしてその人から距離を取って関係を遠ざけ、その人自身には何も言わないで、第三者にその人の批判や恨み節を言いふらし、心の中でその人を裁いて溜飲を下げようとする。

⇒「愛は隣人に悪を行いません」「隣人を自分のように愛しなさい」から言えば、＝恨みや不満を晴らすとか、自分の正しさを相手に認めさせるとかより、その人が立ち戻り、回心して新しく生まれ変わるよう関わっていき、神と人との和解へ招くことが大事。

★共同祈願の第 1 と第 3 がその線に沿った祈りとなっている⇒私たちの祈りにしたい。